
ヴィオロンの妻

村上サガン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヴィオロンの妻

【Nコード】

N3440Y

【作者名】

村上サガン

【あらすじ】

ヴィオロンとは

バイオリンのフランス語読みです。

生まれは東京の笹塚で、

国立音楽大学バイオリン科卒業、

学校でのあだ名「蝶々」、

ピアノバイオリン教師で、

中央フィルハーモニア管弦楽団では

コンサートマスター（コンサートミストレス）をつとめていました。

赤い服の女の子

ヴィオロンとは

バイオリンのフランス語読みです。

生まれは東京の笹塚

国立音楽大学バイオリン科卒業、

学校でのあだ名「蝶々」

ピアノバイオリン教師で

中央フィルハーモニア管弦楽団では

コンサートマスター（コンサートミストレス）

をつとめていました。

ノンフィクションです。

01 「赤い服の女の子」

5月にはいった頃、雨が降っていた。

病院から帰ると妻が言ったことが気になって、

母に持たせた携帯に電話してたずねた。

「赤い服を着た女の子が出てきたって言うてる」

黙って聞いていた母が

「その子はミユキかもしれんね」と、ひとこと答えた。

母のCANはするどい、父が仕事のことと逐一相談していたほどで、

恐ろしいくらいに的中するのだ。

母はカンを働かせた後に寝込むことがある。

尋常でないエネルギーを費やしていたと想像する。

相談したことで不眠にならないか一抹の不安があったが、

気づかう余裕はなかった。

電話を終えて思った。

ミユキが助けに来ているのだろう。

母に初めて妻を会わせたときに、「この子は体が弱い」と人目みて直感した。

もう赤い服の女の子については母には答えが出ていたが、僕には言わないと決めたそうだ。

「顔を見ればわかるけど・・・」と母は言った。

妻の顔をみればすぐわかるらしいが、母は足を悪くしていて、

九州からの上京は、かなわなかった。

もう一度妻が言ったことを思いかえした。

「パパ、赤い服を着た女の子が海に、暗い海に私をひきこむの。

とても臭いの、その子、とても臭いにおいがするの」「

ミュキ

赤い女の子がミュキだと、妻は言わなかった。

僕とて、ミュキとは考えもつかなかった。

ミュキの話しをする前に、自己紹介しよう。

僕より妻の方が有名で、

タイトルのように妻を語る物語だから、
僕の場合は簡単にする。

僕は外資系に勤めるサラリーマンで、
妻とは3月に新幹線で相席になった。

妻に一目ぼれしてしまって、

知り合って3ヶ月後の6月に結婚した。

妻は本に写真があるように、女優そのもの、背は高くやせていて、
足は欧米人のように長い、年齢は僕より一歳下だった。

主婦参加型のテレビ番組に出演できることになり、

妻の友人らは参加できたが、

妻だけは顔が問題で出演を却下された。

局としては、ヤラセはしたくない、

普通の主婦の顔ではなさすぎるという。

妻は怒っていた。

バイオリン一筋で、もしバイオリン志望でなかったら、

女優になっていたかもしれない。

7月にハネムーン、新婚ツアーに参加した。

新婚旅行で冒険をしない方がいい、ガイドつきで安全な方がいい。ヨーロッパに行きたかったが爆弾テロなどが頻発していたので避けて、

ハワイ〜カルフォルニアに行くことにした。

永住したいくらいにハワイが好きで、

住所はわからないが、祖母の姉がハワイに永住していた。

ツアーの間に、他の新婚カップルと仲良くなり、

奇妙なことを言われた。

妻が言うには僕ら二人は成田離婚だそうだ。

成田離婚というのは、死語になっているかもしれないが、新婚旅行からの帰りの空港で、既に離婚状態という意味だ。

他の新婚カップルと違うのは、

親密度を周辺にアピールしていないところかもしれない。手をつなぐわけでもなく、食事風景もセルフサービスで、食べることに集中して黙々としていて、

冷めた関係にみえたのだろう。

妻も僕も無口だし、ドラマでえがかれるような新婚さんとは違いました。

新居は山手線の大塚駅近くにした。

理由は妻の実家が近い方がいいと思ったからだ。

家庭生活を始めるにあたり、印象にあるのは

「自分で着て出社して下さいね、帰宅したら自分で脱いで下さいね。」

夫の身支度をするのは嫌いですから」と言われたことだ。

掃除洗濯は日に数回行つほどの神経質な妻だが、朝起きるのが苦手だった。

僕は弁当が嫌いだった。

贅沢で、作ったものはすぐに食べる。

時間経過したものは口にしなくなかった。

朝は妻の寝顔をみながら出勤した。

夫婦生活初日から長続きできそうだったかもしれない。

夕食はきちんと毎日怠りなく作ってくれた。

帰宅すると妻は晩酌をしながら台所で料理していた。

料理は酒のつまみ中心で、

「キッチンドランカー」と名付けた。

妻は酒豪だが、僕は酒より食事したいタイプだった。

「私だけでよかった。二人とも酒飲みだと

家計は破産しているわ」と好きな酒を独占していた。

妻は煙草もたしなんだが、僕は煙草はやらなかつた。

僕は健康オタクで酒と煙草は老化させるし、声に悪いからだ。

8月になると、妻は中国へ演奏旅行に出かけた。

静岡フィルハーモニー管弦楽団の客演だった。

8 / 1 2 | 1 7 中国公演（北京音楽庁・杭州劇院）

指揮 / 石丸 寛

曲目 / ペンデル：水上の音楽、石丸 寛：中国横笛のための小協奏

曲、

ベートーヴェン：交響曲第5番 「運命」
石丸寛が中国生まれだから招聘されたのだろう。

中国人は「運命」が好きだと言って
練習部屋から、名器ストラディヴァリの「運命」が流れた。

帰国後は中央フィルの秋公演で真剣にバイオリンの練習をしていた。

毎週土日のどちらかは練習に出かけた、妻はコンサートマスターなのだ、

僕はロックバンドのスタジオでの練習とヤマハエレクトーン教室に通っていたので
バランスの良い週末だった。

7

コンサートマスター (concertmaster) は、
オーケストラの演奏をとりまとめる職をいい、
一般には第1ヴァイオリン (ヴァイオリンの第1パート) の
トップ (首席奏者) が この職を担う。

女性の場合はコンサートミストレス (concertmistress) が正確で、
妻はコンミスと呼ばれていた。

ボウイングという運弓法、
弦楽器で弓をどのように動かすかという方法を指示する必要があり、
妻は頭を痛めていた。

妻の演奏をみると、観客にいる僕には知らん振り、
まるで別人のような真剣な顔で演奏していた。

視力がゼロ以下で、コンタクトをしていたが、コンタクトでも視力がカバーできないから、僕のことが見えないかもと思うが、まるで離婚した夫のような感じだった。

本番前は胃が痛くなるタイプで、血液型Aの典型的な緊張体質だし、コンミスが僕に手を振るわけがないかと良い方にも解釈したが、このクールさが妻の特徴だ。

二人で演奏したことがある。

鮮明に覚えているのは、従妹の結婚式の披露宴で

モーツアルトの「アイネクライネナハトムジーク」を

妻がバイオリンを弾き、僕がピアノ伴奏した。

初めてのクラシック演奏に不慣れな僕は不安からテンポが異常に速くなっていく、

妻は見事に僕の異常な速さに合わせてくれた。

それから会社で、会長と家族がイギリスに帰国することになり、池袋サンシャインのホテルで送別会が行われた。

即席バンドを作ってビートルズの「イエスタデイ」をピアノを弾きながら歌ったが、

音あわせしていないのに妻のバイオリンが見事からんできて、やはり僕の妻なのかもしれないと思った。

晩秋だったと思う、妻が妊娠した。

子供を望んでいたので大喜びだった。

妻もオケを休んでも子供が欲しいと強く望んでいた。

初めて新幹線で妻の顔を見た時、

子供が好きそうだと直感、結婚したいと思った瞬間でもあった。

僕はなぜか女の子しか生まれないと信じていて、名前をミユキと決めた。

母乳の行方

僕は風邪で寝込んだことが何度かあったが、

妻は一度もなく健康で、

家事をテキパキとこなし、

「私は強いだよ」が妻の口癖だった。

お腹が膨らんでからも布団干しをやっていて、毎日やらないと駄目らしい。

「こんな時に毎日やらなくても、明日手伝うから」と言って、

布団干しを手伝わなかった。

妻はゴゴトも言わずに布団を干していた。

言い訳じゃないが仕事が精神的に疲れるシステム設計で、

頭を疲労させていて、

家では寝ていることが多く、家事を手伝わないでいたのだ。

さらに言い訳だが九州男児という悪い習慣が残っていて、

家事は手伝わないでいいと思っていて、

「男は外で稼いでナンボじゃけん」というところがある。

反省しても遅いが、結婚して男が家事するようになると、

身に染みて理解するひとつだろう。

家事は仕事より大変だということ。

毎日のふとん上げがいけなかったらしく、妻は異常出血して、

切迫流産の危険ありで入院した。

離婚調停の書類にまっさきに書き込まれるひとつだろう。

妻の「ステイキング」のひとつになった。

映画の題名だが、意味は一撃。

妊婦時に家事の手伝いをしなかったと一撃されることがあった。

入院は長期に渡った、妻の子宮口は緩い体質だったのだ。

5月6日、大型連休の最後の日だった。

流産を止めるために子宮口を縛る直前だったが、

担当医師が休みをとっている間にあっというまに、入院している病院のベッドで流産してしまった。

事件にかけつけた僕は担当医師をにらんだ。

肝心な時に医師不在で申し訳ないような顔をしていた。

医師怠慢だと裁判したくなるほど怒りを感じたが、

ミユキが戻るわけではないので、とどまった。

毎日の病院通いと、家には猫だけが残り、

部屋はすっかり男所帯になっていた。

妻の愛猫「影千代」の糞の後始末が意外にめんどうだった。

下痢はよくするし、猫を育てるのは大変だ。

子育てができる女性かどうかを、見極めるには、

ペットを長年飼っているかは、ひとつのポイントになるだろう。

5月には母が九州から来て家事を手伝ってくれた。

母がミユキの遺体を引き取って、

福岡の祇園町にある菩提寺「万行寺」の墓に

納骨してくれた。

母は僕らに遺体を見せなかった。

だから女の子かどうかわからないが、母はミユキと呼んでいた。

大げさだが妻はマリリンモンローに似ていると思った。

マリリンは二度流産している、子宮口が緩かったようで、

自伝を読んで流産で悲しむ部分は、いたたまれなかった。

マリリンに子供が生まれていたら自殺はしなかったかもしれない。

天は二物を与えない、稀にみる美貌は与えたが、

必ず人よりは劣るものがある。

流産の後、退院して実家で静養した妻に

二度目の仕打ちが襲った。

母乳が定期的に大量に出るので、出し切らなくてはならない。

妊娠後期には妻の胸は二倍以上に膨らみ、

産道を通ることによりミルクタンクとなるようだ。

女体って不思議だ。

タライ一杯に母乳を出す作業を見ていて痛々しかった。

家に戻った後は飲ませてもらって、妻の赤ん坊になった気分だった。

「名前を先につけたから、早く出たくてしようがなかったのよ。

もうちょっと頑張れば未熟児で生きて出られたのに」と、

コゴトも、愚痴も言わない、クールな妻が言った。

生まれるまでは名前をつけないことを決めた。

母がなぜ赤い女の子はミユキだと言ったのか、

妻と僕が思えなかったのは流産した一年後の出来事の解釈にあった。

女は無口なほうがいい

「なぜ、蝶々つて、あだ名なんだ？」

「蝶々みたいに、あっちいたりこっちいたりしているからって
言われた」

「漫画にある『エースをねらえ』のお蝶夫人からきたんじゃないか
？」

「お蝶夫人ね、クールでかっこいいキャラクターよね」

「クールで派手なところはそっくりだと思っ」

流産について愚痴を言うわけでもない、

いらだつこともなく、淡々としている、

自分を哀れんで泣くわけでもなく、八つ当たりもしない。

これはどこから来ているのだろうか、

バイオリンに集中することで悲しさをまぎらわしていたのだろうか。

僕に心配かけないように無理していたのかも知れないが、

江戸っ子、前を向いていて、過去のことでもクヨクヨしない、

竹で割ったような性格で、

男にしたら、カリスマのある良いリーダーになれたらう、

弟が二人もいることも大きく影響していたと思う。

|| || ||

母はおしゃべりで、話さずにいられない、機関銃のようだった。

聞き役が親孝行だと思い、我慢の数時間をじっと耐える。

ラジオのような電源があれば、すぐに消したくなる。

妻は逆に、必要以上しゃべらない。

あまり語らず、クールだ、おしゃべりじゃないことは落ち着かせる。

歌謡曲（八代亜紀の船唄）に、

お酒はぬるめの燗がいい……

魚はあぶったイカでいい……

女は無口なほうがいい……

灯りはぼんやり ともりゃいいとあるが、

男の本音だろう。

男には24時間ずっといつしょにいて疲れない、楽な女性だ。

思えばこれまで無口な女性とつきあっている。

誤解しないでほしいのは、いつも無口ではないことだ。

僕でさえ、おしゃべりになることがある。

妻も熱く語ることは何度もあった。

|| || ||

5月に流産して、妻が健康体に戻った頃の8月に

二人ともに好きな京都へ旅行した。

車で出かけたが、宿泊先は決めていなかった。

初日は滋賀県で宿を探したが、見つからず、ラブホテルに入った。

本当かどうかわからないが、初めてらしい。

回転ベットのボタンを押しては回転を楽しんで、「わあ〜」と声をあげたり、

天井の照明を見て「プレネタリユームのようね」と言った。

旅行の二日目以降は暑い京都に宿泊した。

名所を回ったが大原三千院の苔の庭園が一番美しく、忘れられない。

妻は僕が嫌いな車の運転が大好きで六割は妻が運転していた。

所変われば子宝に授かるというが、秋に妻は妊娠した。

再び女体の話しだが、お産した年が一番妊娠しやすいそうだ。

妻も流産というか早産だった。

お腹が脹らむと昨年の流産のトラウマが襲ってくるようだ。

外を歩くにも、僕の付き添いが必要だった。

平らな道なのに妻が転倒してしまった。

石川医院

|| || ||

舗装された道路にあった微小な砂利に、

妻の靴が少々滑っただけで尻餅をついてしまった。

わっと泣きだした。

あわてて妻の手をつかむと、僕に抱きついてきて、さらに泣き出した。

クールな妻の牙城が崩壊した最初で最後のことだった。

家に戻って様子を見たが、その後出血はなかった。

子宮を縛るのが上手と評判の「石川医院」に、お世話になることになった。

石川医院は自宅から徒歩7分程度のところにあつて、

大塚駅の北口出て左に進み、ラブホテルの並ぶコーナーの隅にあつた。

人気のない場所で、山手線高架橋の空蝉橋の下に、うずまっているようだった。

古いコンクリートの三階建てだったと記憶する。

現在は引越したようで、空き地となっている。

子宮を縛る名医は女医で、医院はベット数が少なく10もなかったと思うが、

妻のような子宮状態で悩んでいる女性で、満席だった。

毎日必ず二回病院に通った。

当時自転車で通勤していた。

会社は自宅から自転車で15分程度の後楽園にあった。

昼は妻の好きなパンやモスバーガーを買って病院で、いつしよに食べた。

妻は夜になると隣のラブホテルから声がしてくると言っていた。

会社と病院は都道436号線という道路でつながっていた。

仕事を終わると436号線の文京区側は「千川通り」と呼ばれた。

進むと右に小石川植物園があり、他には小さい印刷屋が立ち並んでいる。

千石三丁目交差点を越えると南大塚側は「プラタナス通り」と呼ばれていた。

大塚駅に着くと都電の線路を横切って大塚駅北口のロータリーに出て病院へ行った。

入院といっても健康体の妻だ。

夕食は外食で済ませて、

松屋かケンタッキーでサラダと大塚駅のコージコーナーでケーキを買って差し入れた。

牛スジ肉が子宮にいいというので、おでん種で買っていったり、

たまには肉をじっくり煮込んだものを持っていったこともあった。

自炊する気はおこらず、家では家事と猫の世話をを行う日々が続いた。

妊娠期間は十月十日というが、月は昔の「数え」で計算するので

正確には九ヶ月と十日ということになる。

そろそろ生まれる時期の5月になった。

昨年のもとの5月6日を迎えた夕方のことだった。

妻が異常に興奮していて、

僕の手をとって、それからだきついてきた。

妻の手はふるえていた。

異常な状態を石川女医に知らせて、

診てもらった結果、手術しなければならぬと言われた。

勲章とハシコ

石川女医は帝王切開すると言つ。

なぜ帝王切開するのか疑問があつた。

子宮はしばつてある、正確には卵管がしばられている、
細径のチューブのような硬いものでしばられているのが、
手でさわるとわかる。

お腹を切らずに、すべてを膣からの操作で行う手術のよう^{らんかんけつさつ}で、
卵管結紮術というらしい。

しばつたチューブを取れば、赤ちゃんは出てくるはずなのだ。
それが駄目らしい。

帝王切開で、女の子が生まれた。

それと同時に手のこぶしほどあつた肉の塊を見せられた。

子宮筋腫だつた、
昨年の流産の原因でもあるらしい。

母乳のことだが、なんと皮肉なことだろう。

帝王切開で産道を通っていないので、母乳が出ないのだ。

妻の心は複雑だつたに違いない。

赤ん坊はミユキのよみがえりだと思つた。

昨年の5月6日の夜中にミユキを流産して、
一年違うが、翌日の5月7日に生まれたのだ。

誕生日に7がからむ、因縁の数字のようだ。

僕が7月7日、父が2月7日、母が7月31日

妻が7月16日、義理の父母も7がからんでいたからだ。

妻のお腹には見事なミシンの縫い目のような
正中線の手術跡が残った。

「女の勲章よ」と妻は言った。

妊娠線というものがお腹に残ることも知った。

この頃からだろう、

妻のことを「ママ」と呼ぶようになって、

僕は「パパ」と呼ばれた。

妻は赤ん坊を

「ハンコよ、私の判子みたいなものよ」

「ミユキの生まれ変わり」と言っていた。

熟睡できない魔の嵐のクライ・ベイビー・クライの期間が始まった。

赤ん坊に深夜も未明もないのだ、泣き出したら起きて対応するしかない。

ある時便秘になって深夜出勤、

ミルクに混ぜる便秘薬のマルツエキスを探しに薬局を奔走したこと

がある。

哺乳瓶を片手で持って、片足を曲げた膝で、瓶を固定させて飲む、いかにも生意気そうに飲んでいる。性格は持って生まれてくるようだ。

僕に似た頑固一徹さは飲む態度でわかった。

僕が名前をつけることになった。

名前を決めるにあたって決めていたのは国際的に通用する名前であること。

六本木飯倉のキャンティの建物の並びで、飯倉公館の向かいにあった

IBMの研修センターで講習を受けている時に、「リサ」に決めた。

そして女の子には「子」をつけることにしていた。

「子」というのは天皇皇族しか本当は、つけてはいけならしい。

子をつけようと決めたのは、友人の母の葬式に出席した時だった。

葬式はキリスト教会で行われた。

友人の母方の叔父が言った。

「なぜ教会でするんだ。俺は許さないからな、親戚も不満だぞ。いいか、もう一度田舎で、坊さん呼んで葬式するからな」

叔父は納得ゆかないような、気がおさまらない顔をしていた。

僕も教会の葬式は記憶がなく、神父といっしょに歌って送ったが、いまだに忘れられない葬式だった。

叔父が親戚代表でスピーチした。

亡くなった母の名前は「ヒロ」というが、スピーチの中に、ひっかかる一節があった。

「ヒロはヒロコじゃなくて、コがない。どうしてもハイカラにしたいらしい・・・」

「子がない」と二度言う、なにか皮肉にきこえた言葉だった。

「子」がないのは女の子には縁起が悪いと思った。

それでリサコと名付けた。

妻は僕の妻から完全に母にチェンジしてしまった。

朝はきちんと起きるようになり、教育ママになり、亭主より娘に集中していく。

命がけて授かった子は妻にはこのうえもない宝だったのだろう。

二歳になった時だった。

妻はリサコのために二人目を生むと言い出した。

「パパ、お産で母子のどちらかしか救えないとなったら、子供を助けてね。」

リサコのために・・・」

妻は命がけの勝負に出たのだ。

再度帝王切開が、できるのだろうか？

七回忌

母から電話がある。

話し方は九州弁で主体は久留米弁だが、読者にわかりづらいため標準語で書きます。

「来年は七回忌だから忘れないように」

「わかっているよ」

「ごめんね、行けないけど、こちらでお祈りしているから」

「無理しないで、ひっそりと行っから」

「再来年の、父さんの14回忌にはどうしても出たい。」

それが最後になるだろうね、生きていたいね」

埼玉の森林公園駅から無料送迎バスの出ている千代田メモリアルランドに墓を建立した。

最初に墓に入れるのが妻とは想像できなかつた。

母が何を思ったか、福岡の菩提寺にある父とミユキも、

いっしょに墓に入れてくれと言い出した。

妻の葬式が終わると、福岡へ行った。

福岡市に改葬許可申請書を出して改葬許可をえて、遺骨の移動を行った。

菩提寺「萬行寺」は、地下鉄の祇園駅で下車する。

黒田の殿様から忠義であると名をさずかった初代からの墓が全部ある。

先祖は豊臣秀吉の家来で、黒田官兵衛に従事して福岡に来た。家紋に男紋と女紋があるのを知ったのは中学の時だった。

母と僕は、墓守が墓を開けるのを見守った。

墓内に8つの骨壺があり、父とミユキの骨壺を取り出した。

骨壺はミユキのだけ小さかった、中を開けると水がたまっている、

納骨して20年になろうとしている、骨壺の中には水が入るらしい。

母はミユキの骨壺の水をみて言った。

「この水は尊いのよ」

水を母は、自分の手や頬につけて、僕の手にもつけてくれた。

濁りのない清らかな水だった。

僕は初めてミユキの遺骨を見た。

母が言った。

「私の骨壺は父さんの隣に置いてね、その後ミュキだよ」

飛行機に骨壺を二つ持ち込んで機上したのも初めてだった。

また電話の会話に戻る。

「ミュキはりサコの生まれ変わりだよね」

「そうだよ」

「ならば、赤い女の子は誰？」

以前に話したが、妻が入院した時に幽霊が出る、赤い女の子が、自分を深い海に引きずりこむと言った件だ。

「あれは、ミュキだよ」

「ミュキは一人じゃないの？」

「霊界では数で数えないのよ、ミュキは流産で死んだから、

霊界では一番いい、特等席に座っているんだよ」

「年齢にすると、計算が違っただけど」

「霊界に年齢なんてないの、あの時は言えなかつたけど、

赤い子は、お迎えに来たのよ」

「不思議な世界なんだね」

「二人の孫は元気してる？」

「リサコは23歳、リカコは20歳になったよ。

仲良く寝ているかゲームしている」

僕は6畳の部屋にひっこみ、

二人はリビングと別の6畳を専有していた。

「二人産んで、正解ね。」

あの人（妻）、どうしても二人目を産む、

無事に産まれたら、命をかけて産んだと言っていた」

「ああ正解だね、僕が死んだ後も、二人で助け合って生きて欲しい。

しかし、子供のために長生きして欲しかったよ、娘達が不憫で」

「女の子には父より母が一番大事だからね。」

本当に二人には辛いことよね」

「母さんは、もっと早く亡くしたんだよね」

「私は、5歳の時だった。兄と弟と妹を残して死んだのよ。」

母の顔も面影だけ残っている」

「話しはよく聞くよ、継母がきて、さらに継母が三人産んで、苦勞したんだよね」

「孫二人は助け合って生きていくけど、

あなたのことが心配よ。

あの子（僕の姉）がすぐ死ななければ、良かった。

私があなたと暮らしたのが17年、

あの人（妻）は19年もあなたと生活していたのよ。

私より、あなたの良き理解者を亡くして残念よ。

あの方はハデで、贅沢で、あなただから養えたのよ、

でも、あんな品のよい女性と、結婚して

良い夢をみたと思うしかないね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3440y/>

ヴィオロンの妻

2011年12月13日09時54分発行